

学力研の広場

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

NO. 360

2026.2.7

学力研発行

常任委員長 岸本ひとみ

ペイペイ銀行うぐいす支店 普:3607141

二匹の蛙がミルクの入った壺のふちのところで飛び跳ねていました。突然、ミルク壺に落ちてしまいました。一匹の蛙は、ああもう駄目だ、と叫んで諦めてしまいました。そしてガーガー泣いて何もしないでじっとしているうちに結局溺れて死んでしまいました。

もう一匹の蛙も同じように落ちたのですが、しかし何とかしようと思つてもがいて足を蹴って一生懸命泳ぎました。すると足の下が固まりました。ミルクがチーズになったのです。それでピョンとその上に乗つて外に飛び出せました。

(岸見一郎『アドラー心理学入門～よりよい人間関係のために～』KK ベストセラーズ)

楽天主義とは、どんなことがあっても、何とかなると根拠無く思つている状態で、自分で何とかしようとはしません。一方、楽観主義とは、どんなことがあっても何とかしようと行動することです。

天にまかせて何もしないか、可能性にかけて行動するかの違いです。

溺れた蛙は悲觀主義です。悲觀主義と楽天主義は、結局は同じなのです。現実を見て諦めるか、現実を見ないで何とかなると妄想するかです。楽観主義は、現実を見据えて、なお、自分に何ができるかをかんがえて、希望を持って、行動することなのです。楽観主義である人が教師をやり続けられるのかもしれません。(荒井)

CONTENTS

◇特集 教師をやり続けるために必要なこと◇

逆境を乗り越え、楽しむ力に

「子どものために」

教師をやり続けるために必要なこと

教師をやり続けるために必要なこと

教師をやり続けるために何が必要かを考えてみたら…

ブラックの向こう側にあるやり甲斐

自分の仕事が正当に評価されること

加藤英介 ······ 2

宮本 哲 ······ 4

鈴木基久 ······ 7

吉田雅直 ······ 9

堀井克也 ······ 11

根無信行 ······ 14

岸本ひとみ ······ 17

◇連載◇

考える力をつけるための授業の組み立て方⑩ 低学年理科的課題から高学年理科までを展望して

荒井賢一 ······ 19

社会科(歴史) 授業力アップ講座 34 歴史の学び方(歴史研究論文)②

深澤英雄 ······ 21

リレー連載「来年度の全国大会講演者・新井紀子さんについて」

「一に読解、二に読解、三四が遊びで、五に算数！」

山口左知男 ······ 23

第19期先生のための学校・理科「低学年理科的課題から高学年理科までを展望して」

岡本美穂 ······ 25

局長・常任委員長だより

····· 27

学力研カレンダー

····· 28

逆境を乗り越え、楽しむ力に

加藤 英介

今年度の仕事

勤務校では、今年度、育休や退職、体調不良などさまざまな事情で人員が不足している。自分の主な仕事は、総合的な学習の時間の専科・授業研究主任・ICT主任だが、十一月からは、六年の担任としても働いている。この話をすると、他の先生方からは「すごいですね」「先生だからできると思ふ」という応援の声をもらつた。一方で「どうして、引き受けたの。やめておけばいいのに。無理しないでね」と心配してくれる先生もいた。それでも、引き受けたのには理由がある。

それは、僕自身、初任からずつと多くの先生方に、助けられ、支えられ、きたえてもらつた恩があるからである。保護者とトラブルになつたときに、真っ先に頭を下げてくれた学年主任、学級が落ち着かなくなつたときに、支援してくださった四役の先生、急遽休むことになつたときに入つてくる

ださつた他学年の先生など、失敗ばかりの自分にいつもやさしく励ましサポートしてもらつた。一日が終わると「今日も迷惑をかけてすみませんでした」といつも謝つていました。しかし、先輩の先生方からは「気になくていい。わたしもそうやつてたくさん的人に助けられたから今がある。だから、経験だと思って一年乗り切ろう。そして、後輩が同じように困つたときにはサポートしてあげてね」と言われた。

そのときから、僕は学校のためになるの

であればどんなことでも取り組もうと決めている。困つている人がいるのであれば、助ける。大変だと思うことも、やつてみなければ何が大変かもわからないからだ。「頼まれごと」は試されごと」という言葉があるようには、まずは挑戦あるのみと思い、無我夢中で働いている。

実際、週に20時間の総合と合間を縫つての6年のクラスの授業、業後は各学年の授業

総合の打ち合わせや出前授業など外部との連絡など充実した毎日である。そんな日々を送つていると、いつも以上に周りの先生方が助けてくれるようになる。お願いすることが多くなり、先生方への負担も増していくにも関わらず、「英介先生のお願いなら…」と嫌な顔せず引き受けてくれることが多くなつた。最近は、「今日は、どんなことが起こるかな?」とわくわくしながら毎日を楽しんでいる。

大切なのは・・・

今回のテーマである「教師をやり続けるために必要なこと」を自分なりに考えた。その結果、大切なのは「楽しむ力」である。以前、参加した学力研の講座で岡本美穂先生は『楽』には二つの読み方がある」とおっしゃっていた。「一つは、ラクをする。もう一つは楽しむである。楽しむためには、苦しい時期があること、悩む時期があること、もがくことがあることが必要である。それがあるからこそ本当の意味で楽しむことはできる」とも伝えていた。話を聞きながら、「もっと楽しもう」と心に決めた。授

業に対しても、生徒指導に対しても、職場の人間関係づくりでも、楽しむことを大切にして進めてきた。

授業であれば、うまくいかないのは当然であり、常に修行である。自分で考えたところで限界はある。だから、学年の先生に聞いたり、授業の上手い先生に指導いただけたりしている。また、学校外の研修や学力研のようなサークルなど全国の一流の先生に会いにいくのである。これを繰り返すこと、できないことが少しづつできるようになる。各教科を極めても、漢字や計算など超具体的な指導を極めてもよい。もしくは、ミニゲームなどコミュニケーションスキルやつながりを高める実践でもよい。何か一つ、自分のものにするとそこからで起きることが波及していくものである。

生徒指導では、授業妨害や不登校、身体的・精神的な悩みを抱えている子など、セミナーや本を読んでも、その通りにいかないことが経験上ほとんどである。子どもを何とかしようと思えば思うほど、遠ざかっていく場合もある。その子の願いを考えつつ、動き出すまで待つことが大切である。

この「待つ」ということがどれだけ難しいことだろう。言い換えれば、教師がゆとりをもって指導にあたるともいえる。この余白ができるかどうかである。うまくいかなくて当たり前。うまくいけばラッキー。そう思つて毎日の変化を楽しんでいる。

職場では、先生方と多くのコミュニケーションを取つている。朝の挨拶、コーヒーで雑談、補助で入つたときには子どもたちのよさを担任にプレゼントなどをしたり、先生同士の仲を深めるためにカードゲーム大会を開いたり、先生の趣味を紹介してもらつたりと楽しい雰囲気もつくつてている。(もちろん、真面目に授業づくりや学級づくりについても語つています。)

昨年度、同じ学年を組んでいた2人の先生は、今年度、生き生きと輝いている。S先生は去年学級が難しくなり苦しい思いをしていた。しかし今年は、その苦しさをバネにしてあたたかく楽しいクラスを実現している。B先生は、三年目とは思えないほど、学習指導・生徒指導・学年のコミュニケーションと多岐にわたつて活躍し、楽しそうに働いている。

苦しい状況や悲しい思いを経験するたびに成長し、その成長が相手に対する理解と優しさにつながる。この過程を楽しめることが教師にとって大切なと思う。

やるのではなく続ける

「一年の計は元旦にあり」という言葉から今年の目標を決める人もいるだろう。その計画から一ヶ月。目標に向かつてはどのくらい進んでいるだろうか。目標は高くもなく低くもなく、自分にできるかできないか、少しがんばればできそうなくらいが一番よい。そして、毎日できることなら尚よい。本を読むことでも、感謝を伝えることでも何かやると決めて取り組んではどうだろうか。そして、決めたことを続ける。どんな小さなことでもいいから続けることで何かが変わる。そして、いつしか楽しくなつてくる。

そんな僕の成長を支えてくださっている学力研の先生方に感謝しつつ、あと一ヶ月走り切りたいと思う。

「子どものために」

大阪教育サークルはやし 宮本哲

「若い人たち」

今、先生をしている人たちは、小さい頃からの夢が叶えて先生になった人、自分を変えてくれた、支えてくれた先生のようになりたいと思って先生になった人、自分の親が教師でその姿を見て、その背中を追つて先生になつた人など様々な理由で先生という仕事についています。そのため教員採用試験に挑戦し、受かった人たちです。努力をして先生になつています。今年度も私の勤務する学校でも何人の講師の先生方が直接の練習を何度もして採用試験に挑んでいました。受かつたときは、本当に嬉しそうでした。

しかし、教師という仕事に就くまでは、

情熱をもって教師の仕事をしていこうとしているのに、なぜ、三年ぐらいで辞めてしまった人たちが多いのでしょうか。

私の教え子で小学校の頃から先生になりたいという夢を持つて頑張っていた女の子

がいました。卒業文集にもそのことを書いていました。成人式の時に合った時も教育大学で先生になるために頑張っていますと話してくれました。そして、念願の先生になりました。私が夢を叶えることができたのだといい嬉しく思っていました。しかし、三年間

で辞めてしまいました。理由は、子育てに専念したいということでした。産休、育休という制度を使えば、辞めなくてもいいは

ずです。しかし、悩んだ末に退職の道を選択してしまいました。この三年間の間に多くの経験をしたのだと思います。自分の思つていた教師像、子ども像との違いで苦しむことがあります。彼女の大変さを思うと心が痛みますが、せつかく自分の夢をつかんだのだから続けてほしかったという気持ちが強いです。

この原稿依頼をいただいた後（一月）、新規採用の初任の先生に「教師をやり続けるために必要なことは、何か。」という質問しました。少し考えてから、彼は「適度な休み。」と答えました。四月に同じ質問をしたらこのような返答はなかつただろうと思ひます。どちらかというと四月は、色々な場面で強気な言動が多かつたように思います。それが学期を経るにつれ、少し元気がない言動に変わつていきました。

クラスの様子を見に行くと、学級の子ど

もたちと上手くいっていない」ともないようです。しかし「適度な休み」というような答えの背景にはどんな思いがあるのでしょうか。

若い先生が入つても続かない理由は、個々によって様々あると思います。どんなことでも続けることは難しいです。どんだけ続けるからこそ、分かること、見えてくることがあります。だからどの先生も続けられるならば少しでも長く教師を続けてほしいと思います。

私は今年度で教師になつて二十七年度を終えようとしています。今まで辞めずにここまで、そして今からも教師を続けていくために考えてきたこと、してきたことなどを紹介していきます。これは、私が今まで続けてきたやり方なので参考になるかは分かりません。けれども、少しでも読者の皆様にお役に立てればと思っています。

「行動する」

教師になつて初めの頃は、とにかく「行動する。」を心がけていました。私は、民間企業から転職して教師になつたので初めは本当に何もわからない状態でした。当然、授業は下手、学級経営もできませんでした。だから自分のできる」とと言えば、行動することしかありませんでした。言われたことは、「はい、やります。」と答えて行動していました。

一年目は六月から、講師としてスタートしました。この年は、体育の補助、支援学級の補助、不登校の子の登校の手助けなど、何でも屋さんのポジションでした。そして私が一番若かったため、色々なことを頼まれました。

若い頃は、国語であれば、文芸研、芦田教式、分析批評、一読総合法など、本を読んで、色々な方法を学び、面白そうだなと思ったものを担任している子どもたちに授業をしていました。そのような方法で授業

つていました。

とりあえず、頼まれたことは、何も考えずに「やります。」と答えて行動していました。このスタンスは、今も変わっていません。(年齢を重ねると体が思うように動かないことがあります、気持ち面では変わることしかありませんでした。言われたことはあります)。

「言葉と出会い・人と出合う」

何も考えずに若さだけ武器に行動していくと必ず壁にぶち当たります。そのため授業の方法、考え方、生き方などを知り、自分の中に吸収していくかなければなりません。私は、たくさんの中と出合うことでたくさん支えてもらいました。

プールの時期は安全面の確保、泳力を付けるお手伝いから週に一〇時間以上入つていました。

授業中に抜け出した児童を探し、走り回

すると子どもたちも楽しそうにしていたの
で私も満足していました。しかし、色々な
ところから面白そだと思ふ授業をするの
でそこに子どもたちをどう成長させていき
たいのかという教師としての思いがなく、
張りぼて的な授業でした。

そのことに気づいてからは、流行り、目
新しい、見栄えの授業を追い求めるのでは
なく、先人のたちがどのような思いで、授
業や学校生活を通して子どもたちと接して
きたのかを考えながら読書するようになり
ました。それとともに教育書だけでなく、
ビジネス書など幅広く読書するようになり、
多くの言葉と出合ってきました。それがそ
の時々で私を助け、支えてくれました。
いくつか紹介します。

「自分を育てるのは自分」

この言葉は東井 義雄氏の言葉です。自分
の目の前で起こることは、良いことも悪い
ことも全て自分が引き寄せたもの。その現

状をよりよくしていくのは、自分を育てて
いくしかありません。自分の人生を作つて
いく責任者は自分で。周りの環境や人の
せいにしても何も変わらないのです。

「動機善なりや 私心なかりしか。」

この言葉は、稻盛 和夫さんの言葉です。

教師の枕詞としてよく使われるのが「子ど
ものため」です。この言葉は、学校で過ご

していると何度も聞きます。しかし、本当
にそう思っているの?と思ふ人とも少なく
ありません。子どものためと言いながら自
分のために言っている人が多いように感じ
ます。子どものために授業をするといつて
いる人が、教材研究をせず、子どもたちが
授業を理解していないのにテストをして、

悪い点数ならば、子どものせいにする、良
い点数なら自分の手柄にする、こんなこと
をよく見てきました。

「子どもたちを育てる。」という言葉をよく使い
ます。この言葉を使えば、何をしてもいい
ように感じます。タブレットを多く使えば
子どものためになると思っている感が否め
ません。本当に今の目の前にいる子どもた
ちのことを考えたことを支持、伝達してい
るのかと思うことが度々です。

他にも言い出したら切りがありません。
稻盛さんの言葉を借りると動機が本当の意
味で子どもたちのためになつてているかとい
うことが大切だと思います。

私は、今まで「子どものために」行動し、

言葉と出会い人と出会うことを何度も何度も繰り返して今まで教師を続けてこれたよ
うに思います。

このように私が続けてこれたのは多くの
こと・もの・人のおかげです。そしてこれ
からもうこの繰り返しは変わらない思います。
今まで、そしてこれからもそのことに感謝
しつつ教師を続けていきます。

最近、文部科学省、教育委員会、管理職
などは「先行き不透明な時代を乗り切る子

教師をやり続けるために必要なこと

鈴木基久

大学を卒業して中学校の数学科の教員として6年間勤務した。その後小学校に異動し、7つの学校で26年間ずっと学級担任をしている。「教師をやり続けるために必要なこと」について考えてみた。

①教科、生徒指導、部活

初任校では、中2、中1、中1を担任し、女子テニス部の担当になつた。同僚に助けながら生徒指導の問題に対応し、何とか過ごした3年間だった。部活動が盛んで、強豪チームだったので土曜日も日曜日も練習があり、日曜日は終日練習のことも多かつた。

中学校の教員を続けるには、「教科、生徒指導、部活動」で力を発揮できること、それが好きなことが必要な

のではないかと、当時の私は感じていた。もともと採用試験を小学校で受験していたこともあって、小学校への異動を希望した。

②困った経験から学びへ

小学校教員として異動したのは山間部の小規模校だった。各学年一学級のため、同じ学年の同僚に授業について相談できる環境ではなかつた。

初めて参加した学力研の学習会は、百ます計算がブームになつた時期と重なつていてこともあり、会場に入りきらないほどの参加者の熱気に圧倒された。分科会では、私が知りたかった具体的な教科指導の方針や各学年の実践について詳しく学ぶことができた。それ以来、毎年大阪まで行って多くのことを学んでいる。

③学びの場

私は前任校で3年連続3年生を担

たので参加した。

困ることは、学ぶことのきっかけになる。国語の授業が分からないと困り感を、その後もずっと持ち続けていた。数年後に地元の「授業研究の会」に参加し、斎藤喜博の追求方式の授業について学ぶことで、国語授業について理解を深められた。

さらに学力研のゼミナールでは、説明文についても学ぶことができ、今では困っていた国語の授業が好きになっている。

任したことがあつたが、毎年わくわくした気持ちで仕事ができた。それは、前の年にやつた授業の反省を踏まえて、授業を改善していったからだ。「3年生の説明文で要約文に取り組んだらどうか」をテーマに実践し、学力研のゼミナールでアドバイスをもらい、次の実践に生かすことを繰り返したので、子どもと自分の成長を実感できた。このようなサイクルを回すには、やはり学ぶ仲間（同志）が必要だと思う。

④自分の強み、弱みを知る

学力研で学ぶ中で、「リズム漢字」を作ることができた。学力研で発表し出版できることで、教材づくりは自分の強みだと思えるようになった。

反対にこれまでの数々の失敗を振り返ると、生徒指導や学級経営で苦手さや弱い部分があることを感じている。それは、学力研のゼミナールで学ぶ中で、皆さんの実践を聴く中で感じたことでもある。

「自分の強みを生かしていくべきよ。

苦手な部分は、人に相談してアドバイスをもらひながらやっていけばよい」と思えるようになつてから、随分気持ちが楽になつた

⑤追い風、無風、逆風

自分がやってみたいことがあつたとき、いつでもそれがうまくいくとは限らない。異動した1年目は、無理をせず様子を見て、自分のペースをつかむための期間にすることが多い。管理職、同僚、子ども、保護者との関係から、やりたいことを始められないこともある。逆風を感じる状況では、じつと耐えて風が収まるのを待つことも必要だと思う。自分の裁量の範囲で、自身の実践を豊かにしておくこと、アンケートを取り分析して説得力をもつ資料とするなど次につながる準備をすることが大事だと思う。風が収まつたら、自分の実践を広げるチャンスだ。校務分掌や学年内の立場も生かして提案するといだとう。

⑥ロールモデル

2024年の冬のフォーラムで「憧れの先生」について話題になつた。54才の今の私にとってのロールモデルは、60才、70才でも教員を続いている学力研の先生方だ。仕事へのモチベーションを持ち続けられるように努力したいし、土台となる健康管理も気を付けていきたい。

⑦使命感・健康

私の中学校の恩師の好きな言葉が「使命感」だった。使命感とは、自分に与えられた役割や任務を「絶対に成し遂げよう」とする強い責任感や気概のことである。

「教員は子どもの前に立つてなんぼの仕事」だと思っている。だから、体調を崩さないように気を付けているし、人間ドックも夏休みに行くようしている。自分自身の心身の健康を守るために、無理のしきすぎはない。使命感を失つてはいけないと思う。もちろん多様性の時代だからバランス感覚も大事だが……。

教師をやり続けるために必要なこと

大阪 吉田雅直

二十年教師を続けてきて、教師という仕事に「しんどさ」を感じるか、「やりがい」を感じるかは、実は「紙一重」なのではないかと感じています。

私も初任の頃より、学力研に出会うまでは、基本的に教師といふ仕事にずっと「しんどさ」を感じてきました。そして、今年度、同じ学年の新任の先生を見ていても、日々悩み、「しんどさ」を感じているように思います。子どもや保護者という人間相手の仕事である以上、自分の力ではどうにもできないことがあつたり、予測不能なことが起つたりするので、ある程度の「しんどさ」はしかたないのでですが、「やめたい」「これ以上続けていくことができない」と思うまでの理不尽な「しんどさ」は、何とかしなければいけないと思います。そこで、学力研との出会いを通して「しんどさ」が「やりがい」に変わつていった私自身の経験を思い出しながら、教師をやり続けていくために必要なことに

ついて考えてみたいと思います。

① 「こなす」授業から「鍛える」授業へ

私が学力研に出会つて一番大きく変わったのは、授業に対する意識改革です。それまでは、授業とは、日々の業務として、「教科書を教えるという」意識しかありませんでした。もちろん、教師として子どもたちの興味・関心を引き付けられるように、「楽しい授業」を心掛けたいという気持ちは持っていました。しかし、学力研の数々の実践に出会つたことで、授業に対する意識が大きくなりました。それまでは、「いい授業がしたい」という教師の視点だったのが、「どの子も伸ばし、きらきらと輝かせたい」と心の底から願うようになつたのです。そうすると、教材研究や授業の準備にも力が入り、どんどん楽しくなつていきました。

つまり、それまでの教科書を「こなす」だけの授業から、どの子も伸ばし、学力を「鍛

える」ための授業へと大きくシフトしていったのです。教師の意識が変わると子どもたちが変わります。音読ひとつとっても、「この先生、なんだか音読にすごくこだわっているな」という教師の本気が子どもたちに伝わり、子どもたちの声が変わっていくのです。そして、その姿を見て、また教師のやる気に火がつくという好循環が教師と子どもたちの間にできていくのです。テストも「これだけ教えたのだから、後は自己責任」と丸投げするのではなく、何とかして全員百点にしたいと考えることで一気に楽しくなります。子どもたちは、どの子も鍛えてもらいたがっています。「この先生は、ぼくたちを本気でかしこくしようとしてくれている」と感じた子どもたちは、教師を信頼し、教師にしつかりついてくれるようになります。それが、学習規律のベースになるのです。この業務として「こなす」だけの授業から「鍛える」ための授業への意識変革こそが、教師のやりがいにつながるのでないでしょうか。

② 保護者とつながり、信頼を得る

学力研と出会う前の私は、子どもたちとつながることしか考えていました。休

み時間に子どもたちと全力で遊ぶことで、子どもたちとつながり、その関係性を授業に持ち込むことで、なんとかなると信じていました。保護者との関係も、子どもたちとのつながりが良好であれば、なんとかなると安易に考えていました。しかし、子どもたちとつながることと、保護者とつながることとは、全く別次元の問題なのです。

当時の保護者にとって、私は「よく遊んでくれる先生」程度の認識だったと思います。しかし、学力研に出会い、子どもたちを鍛えるための理論と実践について学んだ私は、学級通信で、いま学級で取り組んでいることの意味や子どもたちの成長について、どんどん発信していくようになりました。すると、今まで感じたことがなかつたような保護者からの信頼を得ることができるようになつたのです。それまで何か言われないようにびくびくしていた保護者との関係が、子どもたちの成長をともに支えるパートナーとして自信を持って向き合えるようになったのです。これは、私にとって本当に大きな発見でした。特に年度初めの一週間は、これでもかというくらい、毎日学級通信を発行し、学力づくりや学級づくりに対する私の「こだわり」や取り組みをし

つかりと伝えるようにしています。このよううに子どもを介して間接的に保護者とつながるのではなく、保護者と直接つながり、保護者の信頼を勝ち取り、保護者を味方につけることができるかどうかで、子どもたちとの信頼関係や教育効果は何倍・何十倍にも高まります。子どもたちとの信頼関係づくりは、毎日の授業を通して一年間かけて積み上げていくことができますが、保護者との信頼関係づくりは最初が肝心です。

新年度、ぜひ最優先課題として取り組んでみてください。

③ 「こだわり」にこだわりすぎない

学力研に出会つて五、六年ほどして、転勤がありました。市内移動とはいえ、市のはずれの小規模校から市の中心の大規模校への転勤は、それだけでなかなかのストレスだったのですが、前任校と同じ五年生担任ということもあり、学力研として実践を続けてきた自信もあつたので、自分の教育実践への「こだわり」を前面に押し出して、学力づくりと学級づくりに全力で取り組んでいました。はじめは子どもたちも意欲的で、しつかりとついてきてくれていたのですが、だんだんとしんどくなり、子どもた

ちとの関係も悪くなつて、私も体調をくずしてしまふという事態になつてしまいました。いま振り返ると、それまでの経験から「こうすればこうなるはず」「これだけやっておけば大丈夫」という慢心があつたのではないかと思います。

教育実践に「こだわり」は必要だと思います。こだわりがあるからこそ、大切なものとそうでないもの、不易と流行、いま最優先で取り組むべきこと、など、時代に流れされることなく、自分の頭で判断することができるのです。しかし子どもたちの実態や保護者の願い、地域性などを無視して、「これさえしておけばなんとかなる」さらには「なんでやらないんだ」と子どもたちを責めるように気持ちがあると、子どもたちと気持ちがかみ合わず、どんなに優れた実践も、うまくいきません。「こだわり」を大切にしつつ、まずは子どもたちとしっかりと向き合い、ゆとりを持つて「こだわり」にこだわりすぎない「心の余裕」が大切なではないでしょうか。

教師をやり続けるために何が必要かを考えてみたら…

春日井学力研 堀井 克也

◎なぜ教師をやり続けられたのだろう…

教師の離職率について調べてみたのですが、総務省の統計によると、労働者全体の平均と比較しても教員の離職率は低い傾向にあるようです。ブラックだブラックだと言われて久しいですが、それでも教員を辞める人はそれほど多くはないそうです。

しかし、教職経験の浅い若手に限つて見てみると、離職率は上昇を続けているようです。東京都のデータでは、採用後一年以内に離職する割合は年々増えていて、二〇一四年度では五・七%に達したとのことでした。教員を志し、採用試験を突破して教壇に立つても、一年も経たずに辞めていく人が二十人に一人以上いるという事実に、ショックを受けました。

また、精神を病んで休職する教員の数が増え続けてついに七〇〇〇人を超えたという事実も、忘れてはならないと思います。

◎学びで世界の見え方が変わる

一つだけ確信をもつて言えることがあります。それは「学び続ける」ことこそが、教師をやり続ける…それも、ただ続けるだけでなく、情熱をもつて続けるために必要なことです。この学びも、外から押し付けられた学びではなく、自ら進んで学ぶタイプの学びでなければなりません。伸び続ける教師には、そうでない教師には無いある種の雰囲気というか、オーラのようなものが備わると私は信じています。そしてそれは、子どもにも何となく伝わっているのではないかと、経験的に感じています。あらゆる学びについて言えることですが、「堀井さんは本当に仕事が好きなんだね」「いつも生き生きと仕事していますよね」とよく言われます。(ただ、四十歳を過ぎて、エネルギーの衰えも感じつつあります…)

今回の特集テーマで原稿依頼を頂かなかつたら、自分がこれだけ長く教師をやり続けられた理由について、改めて考えることも無かつたかもしれません。授業における発問もそうですが、問われることつて本当に大切なんだなと気付かされます…。

離職まではしていなくても、休職している教員がこれだけたくさんいますし、一度休職した方が復帰するのも大変だと思います。一方で自分自身のことを考えてみると、学年主任に厳しく辛く当たられた初年度こそ辞めることを考えた時期もありましたが、それ以降は毎年楽しく生き生きと仕事に取り組むことができています。間もなく十六年目が終わろうとしていますが、周囲から「堀井さんは本当に仕事が好きなんだね」とよく言われます。(ただ、四十歳を過ぎて、エネルギーの衰えも感じつつあります…)

あらゆる学びについて言えることですが、学べば学ぶほど「世界の見え方」が変わつてきます。例えば私は物語教材の授業が大好きなのですが、教材を深く解釈すると、教材そのものの見え方が当初と変わるものでなく、それを通して自分の今生きている世界の見え方と、その世界との関わり方が少し変わるので。例えば光村五年『たずねびと』の教材解釈を通して、以前よりも日本がかつて経験した戦争と原爆投下、さらには今も世界で起きている戦争や紛争に

ついての関心が高まりました。以前なら読まなかつたような本も読むようになり、「自分にも責任の一端があるのだ、当事者の一人なのだ」という感覚を得ました。ここまで来ると、どのような授業をすれば子どもたちにもこの感覚の一端でも味わわせてあげることができるのか…と、授業づくりに向けてやる気が湧いてくるのです。

様々なことを学べば学ぶほど、教師としてできる仕事の幅や深さが増していくように思えます。そうすると、若い頃よりも教師という仕事のやりがいが大きくなつていよいよ感じるのです。日々、辛いことやしんどいことはもちろんありますが、やりがいが心の支えになるかもしれません。

◎ 学びに開かれた心と体をもつこと

では続いて、「学び続ける」ためには何が必要なのかを考えてみましょう。

私にとって教師人生一つ目の転機は、教員二年目に同じ職場に学力研で学んでいる方が赴任してきたことです。私が「通信教育で免許状を取つたので、専門と言えるものがいいんですよ…」とつぶやいたのに對して、その方は「それなら、夏休みに大

阪まで勉強しに行かないか?」と誘つて下さつたのです。それが学力研の全国フォーラムだったのですが、今考えるとよく大阪まで出掛けていたな…と思うのです。もちろん、その方の日頃の姿を見ていて、いいな、あんな先生になりたいな、と思つていたのも大きかったです。けれど、人が良いと思うものを薦めてくれた時に「はい」と素直に応じられるような、いわば学びに向かつて心が開かれた状態にあつたことが、あの時大阪まで行つてみようと思えた一番の要因だったような気がするのです。

その後もいろいろな転機がありました。そのどれもが、自分からつかみに行つたとか、心待ちにしていて飛びついたとか…そういうものではなくて、人から薦められたり、パッと目の前に飛び出してきたりしたものを、素直に受け取つただけの、ような気がします。中には少し勇気が要る瞬間もありましたが、後でふり返つてみると「あれば人生の分かれ道だったんだなあ…」と、嬉しく、誇らしく思い出されるのです。

心だけでなく、体も学びに向かつて開かれていることが大切です。どういうことが

というと、過労だつたり睡眠不足だつたり二日酔いだつたりすると、イライラしやすくなつて仕事に支障が出るだけではなく、学ぶ意欲も湧き辛いのです。ですから、健康的な生活を送ること、送ろうと努めることが大切です。（自戒の念を込めて…）

また、生活の中のありとあらゆる余白を、スマホを触ることで埋めてしまふと、自分の外側からやつてくるものを素直に受け取る余裕が無くなってしまいます。スマホから学びのきっかけを得ることも無いわけではありませんが…余計なことに時間と関心（人間の関心は有限である、）という考え方を最近知りました。有限だからこそ、有意義に使いたいですね）を奪われてしまふことは避けたいと思います。スマホを手放して運動したり、ボーッと考え方をしたりする時間を作ることも、大切です。

◎ 教師という生き方を「哲学する」

前節で、学びに向かつて開かれた心と体をもつこと、そして人から薦められたり、パッと目の前に飛び出してきたりしたものを素直に受け取ることの大切さについて述べました。しかし、そうなると「自分の外

側からやつてくるものに、うかつにほいほいと飛びついていて本当に大丈夫なのかな?」という懸念も湧いてきます。「あなたはまだ幸い経験が無いかも知れません。世の中には悪い人もいっぱいいるんですけど」と言いたい人もいるかもしれません。その通りだと思います。だからこそ、何を受け取り、何を受け取らなかのが自分自身で考え、決めていく必要が生じます。

法政大学の児美川孝一郎教授は「教育改革」は何を改革してきたのかに、次から次へと降りてくる「教育改革」によって、現場の教師たちはいわば「改革疲れ」のような状態に追い込まれていると書かれています。また、そうした「教育改革」の大半分は、現場の教師たちへの敬意を欠いていつも痛罵されていました。実に痛快です。こうして次から次へと上から降りてくる「教育改革」の全てを大切に受け取つていたら、果たして幸せに教師をやり続けることができるのでしょうか。私はあまり賛成できません。そこには教師の主体性が無いからです。「いいから黙つて言うとおりになさい」と言われて、やる気は出ません。

降りてくるものの中に、もし自分が良いと思えるものがあるとしたら、それは受け取ればよいと思うだけです。

何を受け取り、何を受け取らないかを決めるのは自分自身であり、そこにその人自身の生き方や考え方方が表れてきます。ですから、教師をやり続けるためには学び続ける必要があり、学び続けるためには、教師としての生き方や考え方について、深く深く考えていく必要があるのです。(これとは全くの真逆で、自分の頭で考えることを完全に放棄して生きていく……というのも、教師をやり続けることだけを目的とするならば、有効な戦略なのかもしれません……)

ついで、「哲学する」のです。

教師をやり続けるためには何が必要なのか、という入り口から始めて、最後はなんと教師という生き方を「哲学する」という話に到りましたが、これは今とても大切なことだと考えています。昨今、自分の頭で考えない人が増えていると実感しています。周りをキヨロキヨロ見回すばかりで、自分で考えたり、自分に問いかけたりすることが忘れ去られようとしているのです。

この文章を読んだみなさんが、自分の教師としての生き方について少し考えてみようかと思って下さったら幸いです。私はまだまだ教師をやり続けようと思いました。

す。それは、本当に簡単に言えば、「自分の頭で深く考える」ということです。これがなかなか難しくて、ついどこかで聞いたり読んだりした誰かの言葉で考えてしまします。それを頑張って手放して、自分の言葉を探しながら、考えます。自分の頭で考えることではありません。誰かと対話しながら、自分と他者の考えの違いに気付きながら、考えるのです。教師としての生き方に

ブラックの向こう側にあるやり甲斐

大阪 根無 信行

一、はじめに

教員採用受験者数が、十年前の半数・・・

など、新採用教員のなり手が少ないことは事実です。大阪では採用年齢制限をなくしたにもかかわらず、志望者は増えません。若い人に限らず、教員になることを希望する人は減っているようです。その理由のひとつは、「教師の仕事はブラック」というイメージが広がってしまっていることがあると思います。

「ブラック」と噂される原因を検索してみました。すると、「長時間過密労働」とか、「残業・持ち帰り仕事がなくならない」などが上げられています。が、そもそもそれは「教員不足」でなければ、解決するはずの要因です。また、「ペアレンツがモントター」や「学校はもう時代に合わない」などの情報も検索すると出できます。けれども現場にいる私たちからすれば、これはいわゆる『ブラック』と呼ばれる直接の原因ではないと思っています。本来教師の仕事、

二、教師を続けなくなってしまう」と

私は20年以上教員をしていますが、教師として、授業力やコミュニケーション力、子どもへの生活指導力などに長けてるわけではありません。決して、謙遜などではなく、授業や学級づくりがうまくいかないことはたくさんありますし、先輩はもちろん、後輩や採用されて間もない若い先生でも、とても上手にクラスづくりをされていて、今でも学ばせてもらっています。それでも、30年近く教員を続けられてきたこと、

今、若い先生が辞めてしまうこととの違いは、この20年の学校現場の変化を見てきたか、知らないか、だと思っています。

私が勤めた頃は、「放課後」がありました。その間に、教室に残る子どもと話をしたり、運動場で遊んだり、勉強が苦手な子とは宿題を一緒にしたりして過ごしました。提出されたノートを点検して、学年会をして、明日の授業準備をして学校を出ました。クラスが落ち着かないこともあります。家庭訪問をして保護者の方に励ましたり、職場の先生に授業を見せてもらったりすることもありました。それが、今

は放課後に子どもを残してはならない、週のほとんどが会議や出張研修、学年集団が集まる時間が無く個別化、かと思えば働き方改革のもと、学級通信は出せず、家庭訪問はなくす、目の前の子どもに合つて、合つてないにかかわらず、取り入れなければならぬスタンダードといわれるものを授業に組み入れなければならないなど、学校で行われることが変化してきました。そこが、「ブラックに変わってきた」のです。私たちは、その変化を運良く「見てきて」いるので、これはいらないな、とか、こつ

ちの方がいいな、とか、判断材料があるため、不自由ながら、納得のいく方法で取り組めます。ところが、採用されたばかりの人は、放課後がなく、会議が多く、「教員評価のための自己申告シート」の提出と面談を定期的に求められ、そのための授業をし、遠足の候補地も選べず、保護者とつながりにくい、「今」が当たり前なのだと思つてしまします。それは以前にはなかつたことなので、近年採用された人にとっては、初めからある「大変」なので、「下ろされてくる仕事に追われる、自分は仕事をうまくできない、子どもが伸びない」と、気づかないうちにその大変さをため込んで、悩んでしまうのです。

こんな先生になりたい、こんな授業をしたい、という思いでなつた教師本来のやり甲斐のある仕事をする余裕が与えられないまま、「大変」な業務を「当然」のように課せられては、辞めたいと思つてしまふのも無理はないのかもしれません。

三、教師をやりつづけるために

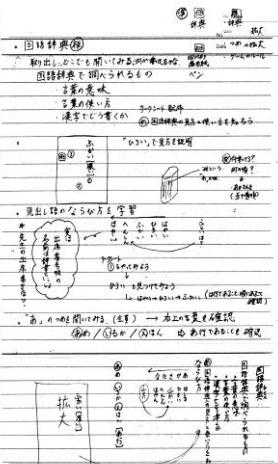
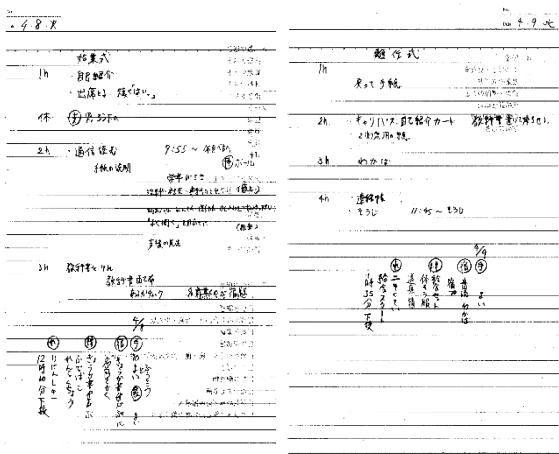
そんな現代の学校で教師をつづけるためにはできることは、まず、今の教師の仕事を、

「子どもを伸ばす」ことにつながる仕事なのか、そうでないのかに分けてみることであります。子どもを伸ばす取り組みには仕事として時間をかけ、そうでないものはあつさりと作業にします。自分一人で判断するのも不安なので、同僚や信頼している先輩に相談してください。今年度も、ICT活用、デジタルリテラシー教育、授業でのAI活用、小中一貫、個別最適化学習、自由進度学習、探求活動・他、盛りだくさんの研修が、同じテーマで複数回にわたつてありました。これらの研修のまとめは、一律に、「みんなで考えて授業に取り入れていてください」でした。今までの枠組みの中に、すべて授業に取り入れるなんて、できるでしょうか。いくらよい取り組みでも、何かを取り入れるためには、何かを減らさなければなりません。若い先生は、そう言われても、「しなければならない」が先に思ひ浮かぶと思うのです。そうすると全てを詰め込もうとして、時間が過密になるのです。同じ授業づくりでも、音読、書き取り、計算は、不易に行われている教育活動だと思っています。学校はいつまでも同じ事をやつてている、のではなく、子どもたちに力

をつけられる手立てだから、今でもやるのです。新しいものを取り入れたくなる心情は分かります。研究授業で、「今回は新しい方法でICT機器を個々に子どもが使用しており、一人ひとりがいきいき活動していましたね」、などもよく聞きく会話です。でも、教師としては毎年変わらないこれまでの活動をしていたとしても、今受け持っている子どもたちには、初めての経験であるはずです。ICT機器を使わない授業で、また、自由進度でなく一斉授業で、子どもたちの学力を伸ばせなかつたという反省が上がつているわけでもありません。子どもたちを伸ばす活動とそうでないものを話し合つて分け、大事な活動をこつこつ続けることがいいと思います。

次に、1年間、学校の流れを簡単に記録しておくことです。年度のサイクルがあるのが学校です。また、小学校は入学してから卒業まで、6年間というまとまりがあります。教師の仕事に就いて最初の1年はどんなものか分からないので、授業や学校行事を行うためには、準備や先回りすることが難しいです。でも1年間の流れがわかると、どれくらい前から準備にかかるといいか、

子どもがつまづきやすいポイントは何かと
いう経験が生かせます。ずいぶん対応しや
すくなると思います。学力研の先輩に教え
ていただいた方法ですが、私は、記録した
ノートをもとに、また次の年も、先の予定



を簡単にノートに計画しています。1日で
B5サイズ1ページくらいに收まります。
それが、日々変わる現場や目の前の子ども
たちの様子に合わせた、手立ての整理にな
っていると思います。

最後に、教師の仕事に「やり甲斐」を見
つけられたらしいなと思います。自分が教
育実習に行つたときに担当してくださった
先生が、「実習を通して、教師ついていい仕事
だな」と思つてくれたらしい」とおっしゃ
っていました。その実習終わりの感想が、
今でも残つてあるのだと思ひます。受け持
つた子どもたちが、勉強してかしこくなる、
できるようになつて喜ぶ姿を見せる、子ど
もたちの力が伸びた実感が、「やり甲斐」に
つながります。先ほども書きましたが、小
学校なら6年間のまとまりがあります。担
当した1年で取り組んだ結果、子どもの伸
びが現れない時があるかも知れません。で
も、子どもの成長はそんなものもあるの
ではないでしょうか。今年の学年で取り組
んだ成果が、次の年、3年後、もしかした
ら中学生になつて現れることがあるでしょ
う。1年間で教科を履修させることに重点

を置くのではなく、またそれを自己評価に
せず、実践を通して、何年か後も見通して
どの子ども伸ばすことが教師の仕事のやり甲
斐だと思えると、まだまだ教師を続けるこ
とができるのではないかと思います。

四、おわりに

学力研などのサークル活動のようない
わゆる職場の外の学びは、教師の仕事を続
ける原動力になつています。教師の仕事に
も、転勤はあります。初任者ではなくても、
転勤したときの「分からぬ」違和感は、
慣れないことから起きます。長く前の職場
にいたことで、慣れすぎたことが、転勤先
との違いについて行けないからです。そ
なる前に、サークルで交わされる新鮮な提
え方や、新しい取り組み、不易な取り組み
の本質を交流することで、ブレずに新しい
環境にも向きあえる、そのことはとても大
きいと感じています。迷つたら、聞く。聞
ける人がいる。ひとりではない、仲間がい
る安心感、それに支えられて教師を続けて
こられたのだと思つています。

教師をやり続けるために必要なこと

★自分の仕事が正当に評価されること★

加印 いろえんぴつ 岸本 ひとみ

なかなか難しい企画をいただきました。

昨今、教育職はブラックだと言われる中、続けることの困難さをひしひしと感じます。この仕事しか知らない私にとっては、他職との比較もままならない……。はてさて、どうしたものかと悩みました。

最終的には、開き直って、なぜこの仕事を続けられたのかを、みなさんにお伝えしたいのですが、考えました。職歴だけは、いたずらに長いのが私の取柄じやないかと、半分苦笑いしています。

◆20代 早く1人前になりたい

第二次ベビーブームの子どもが、小学生になる1980年に、大量採用されました。同輩の中には、最初から技量も志も優れた人もいて、自分が遅れをとっていることは明白でした。何をやっても、失敗ばかり。八方ふさがりの中、何とか、学力研実践にしがみついて、あがいていました。

幸いなことに、故人となつた岸本裕史さんはご縁があり、「いつでも、だれでも、どこでもできる」実践は、身近なものだったのです。

保護者からの評価は、若いけど、きちんと「読み、書き、計算」の指導をしてもらえるというものでした。その頃の教え子の大人になつてからのひとこと。「先生、途中で投げるつでしなかつたもんな。『絶対できるんやから、継続は力』って、力説してたで。」

◆30代 実力不足にふりかかる困難

子育て真っ最中の30代は、なかなか厳しいものでした。一番大変だった思い出。6年担任で、明日は年度初めの学級懇談会、PTA学級役員の方と打ち合わせをしようという直前に、わが子が熱性痙攣を起こし、救急搬送されたことです。

えてして親が忙しくて、緊張している時

ほど、わが子も体調を崩すもの、ということは、この時に身をもつて知りました。翌日は何とか出勤できたものの、参観授業も学級懇談も上の空でした。

それから、33才にして学年主任になつてしまつたこと。療養が出て、担任が交代したためでしたが、「えつ、なんでも！」と心の中で絶叫したのを覚えています。

学年経営をしなければならなくなつた時にも、私のよりどころとなつたのは、「読み、書き、計算」の基礎をきたえていくという学力研実践でした。何しろ経験10年未満ばかりの学年団ですから、いつしょにできることは限られていたのです。20代で出会つた、「いつ、どこ、誰でも」実践のありがたみをこの時ほど感じたことはありませんでした。

後で聞いたこと。「危なつかしい主任さんやつたけど、子どもに力をつけようと、一生けんめいやつたから、応援していました。」この時の保護者さんたちは私よりもちよつぱり年上です。今でも私の応援団として地域で支えてくれています。今は70

代。地域自治会や老人会の役員さんです。

◆40代 研究主任への道

学年経営から、学校全体の指導に目を向ける年令になりました。ここでも、学力研究実践を続けてきたことが、私の支えとなりました。「いつしょにできることから、ぼちぼち進める」という視点から、学校全体を見ることができたからです。

それから、流行り廃りのある実践に、ふりまわされないということとも、同僚からの信頼を得ていたようです。文科省から出でくる、矢のような「教育改革への指針」に対しても、現場でできることと、できないことをきつちり分けて、できる」とだけを提案するようになりました。

この頃になると、地域や同僚、保護者からの評価は、担任してもらつたら、力がつく先生、となつていたため、けつこう無理も押し通せるようになりました。

◆50代 教務ですか？

同輩が管理職になつてしまつて、平教員が少ないので、仕方なく「教務主任」に。でも、担任できないのならしない、という

方針でした。たださえ、年下の同僚ばかりなのに、担任を離れると、どうしても、同じ目線で苦しいことを共有できなくなつてしまつのが怖かったからです。中には、担任ではなくなつても、ちゃんと同僚性を發揮できる優れた教員もいますけど、私はそれほど優れた人間性を持ち合わせていません。

教務をしながら、実践していると、学校の中の無駄なことがよく見えるようになります。地域や保護者との連携、管理職との調整など、目には見えないけれど、大事な視点を身につけることができました。

この時わかつたこと。保護者の一番の要求は、「学校で、わが子が賢く健やかに育つてほしい」ということでした。猫の目のように変わる流行の実践をしてもらつてもけつこう。ただ、子どもが楽しんで、力をつけてくれれば、それでいい、という願いの本質を見ました。

◆60代 ワガママ、暴走老人へ

そして、現在。年末になると、毎年翌年の講師登録の電話が、何本もかかるときま

す。人手不足なので、文科省の指針を全然気にしない暴走老人でも、とりあえず1年間学級担任を任せられるなら、喉から手がでるほど欲しい、ということでしょう。最近は、退職した管理職の口コミで、全然知らない地域からも電話がかかってくるようになりました。

それもこれも、子どもたちの「できた、わかつた、つながった」を毎日見ることを楽しみに、実践を続けてきたおかげでしよう。

◆「やりがい搾取」が一番ダメ

子どもの成長を見続けることができる素晴らしい職業なのに、その機会を奪つてしまつような現在の教育政策(施策としか思えないのですけれど)のために、やりがいを搾取されるから、みんな辞めてしまうのではないか。

正当に実践が評価されれば、少々苦しくても、何とか乗り切れるものです。学力研でぜひ、やりがいを見つけてほしいものですね。

考える力をつけるための授業の組み立て方⑩

大阪教育サークルはやし 荒井 賢一

低学力問題に対する理科専科としてどう取り組むか

化学、生物、地学などの科目の総称。広く、人文科学、社会科学以外の学問の分野。
『日本国語大辞典』

「理科」とは何を教える教科か？

理科とは、理由を考える教科だと、私は考えている。

なぜ、空は青いのか。なぜ、物は下に落ちるのか。なぜ、月は日によつて形が変わるものか。などの自然現象や物理現象などに、なぜと疑問を持つことができ、その理由を考えることができ、さらに、その疑問や観察や実験に解き明かしていくこと、それが理科や科学なのではないだろうか。

ただ、あの人はなぜいつも怒るのか。なぜ、あの人は勉強ができるのか。みたいななぜは、理科では扱わない。人間科学や心理学などでは扱うだろうが。では、学校教育で、理科や科学を教える必要があるのだろうか。私はある、と考えている。なぜかといえば、結論から言うと偏見をなくすためである。自然現象、物理現象のなぜを考えると、様々な理由を思いつくことができる。

毎日、見ているはずの空の雲や太陽や月だつて、なぜと問われると、子どもたちは様々な考えを出すけれど、それぞれの考え

同士では矛盾が発生する。でも、どの理由・考えが正しいかは、多数決では決められない。その理由・考えが正しいかどうかは、観察や実験で確かめるしかない。科学的見方が、偏った考え方をただせるわけである。

「理科」や「理」を辞書で調べてみると
理科…自然の「ことについて学ぶ教科。
『例解学習国語辞典』

物理現象も自然科学に含まれるのだろう。この説明はしつくり来た。ちなみに、「理科」の対義語は「文科」である。

文科…哲学、史学、文学など数学・自然科学系統以外の文化に関する学科。法律、経済、商科などの学科を含めて、この場合もある。
『日本国語大辞典』

文系に対する理系は、ここから来ているのだろう。

漢字の「理」には多くの意味があるが、理科の理に当てはまりそつなのは、

理…道理。「ことわり」
『漢辞海』

「理」も「科」も一年生で習う漢字である。自然とあるが、物理現象も自然と言つていいのだろうか。

「道理」よりも「ことわり」の方が近い気がする。「ことわり」は要するに、「理由」となるだろうか。

やっぱり、「理由を考える教科」が「理科」でよさそうである。

理科…自然現象・自然科学を内容とする学校教育における教科の一つ。また、物理、

低学年理科と生活科

現在、理科は中学年から始まる。

私が小学生の頃は、低学年でも、理科と社会があつた。(生活科は存在しない。)

低学年理科は、昭和16年（一九四一年）～平成3年（一九九一年）、ちょうど50年間（半世紀）行われていた。

現在、低学年理科が必要かどうかの論議は置いておく。なぜなら、今後、生活科が廃止され、低学年の理科や社会が復活するとは思えないからである。

それならば、現在の生活科で、中学年理科につながるような学習の仕方を提案した方が有意義だろう。上が小学一年生の生活科の教科書（啓林館）の内容である。理科につながりそうなのが、「わたしのはなをそだてよう」、「なつとなかよ」。



し」「生きもの大きさ」「あきとなかよし」「ふゆとなかよし」である。一年生の生活科は、理科とのつながりが多いのだ。

『わくわくせいいかつ 上』（啓林館）の「わたしのはなをそだてよう」に、理科的知識があるかどうか教科書を見ていい。

「たねをまく」とのページに、「たねのまきかた」が載つていた。

「まなびのひんと」と書いています。しかし、「たねのまきかた」の知識である。

3年理科の「たねのまきかた」は上の通りである。

「たねの大きさ3つ分」というのは、小さいタネなら当然浅くなるし、大きいタネなら深くなることになるので、理にかなつているわけである。



次のページの吹き出しに、「こんなふうにめがでたよ。」とあるが、やっぱり「め」の説明はない。

生活科の教科書にも、理科につながるものはあるが、その内容は不十分であり、理科的語彙の定義も載せられていない。

要するに、生活科を教える先生次第で、理科的知識や考え方方が身につくかどうかが決まるのである。

生活科の教科書の巻末に、「観察のための視点」が載つていた。

この視点をしっかりと身につければ、身につけるだけでも、今後の理科の学習に役立つんだが。

歴史の学び方（歴史研究論文）②

学力研常任委員 深沢 英雄

一、子どもの調べたいことを最優先する

取り組みの4段階

- (1) テーマを決める 十二月中
「心ひかれた人物について」「興味のある歴史について」

- (2) 調べる 一月末まで

- ・図書室の本（伝記・歴史資料集・百科事典）教科書、新聞
- ・地域の図書館の本、書店
- ・記念館や資料館に手紙を出す
- ・インターネット、古本屋
- ・本や資料を読み、必要事項をノートに書く

- (3) まとめる 二月末まで

- ・下書き
- ・清書
- ・製本

- (4) 発表する 三月上旬

子ども向けの本と図書室で調べます。そ

(1) テーマを決める

ここで時間がかかります。男子の場合、比較的戦国時代の人物に、女子は、女性人物の生き方に興味を示す傾向があります。何を書いたらいいか、分からぬ子には、その子が関心をもっていること、

社会の授業でおもしろかった時代について話をしています。すると、しだいにテーマがしほれてきます。人物だけなく、ピアノを習っている子が音楽をテーマに、新体操のレッスンを受けている子がは新体操の歴史をテーマにしました。

(戦国武将)織田信長など（幕末・明治維新）坂本竜馬など（歴史上の日本女性）奥弥呼（外国の人物）アンネフランク（歴史）新体操など

(3) まとめる

プロットの立て方を指導します。形式はつきのようにしました。

◎目次（二枚）

◎はじめに（二、三枚）
研究の動機||人物（歴史）を選んだ理由と調べてみたいことを書きります。

◎章立て（二十枚）

三章から五章くらいの章立てをさせ、章の中をいくつかの内容に区切れます。おもな業績、人物のあらまし、人物に対する自分の考え方や疑問をつづらせます。

◎終わりに（三・四枚）

人物を調べてわかつたこと、考えたこ

の次に地域の図書館や本屋で本を探します。私が図書館にいて、子どもたちから頼まれた本を借りたり、コピーもしました。音楽の歴史の調べた子は、音楽の先生から本を借りていました。お母さんと本屋や古本屋めぐりをした子もあります。博物館に資料を送つてもらうように手紙を書いて子もいました。本や資料を読んだことをノートに書いていきます。

と、論文を書くなかで成長したことなどを、総括的に書かせます。

◎参考文献（一枚）

調べるのに使った書名を書き出します。

（4）発表する

最後の授業参観で、卒論発表会をします。持ち時間は一人一分です。論文をもとに、一分でしゃべることができ原稿を書きます。絵や図を用意した子もいました。

授業参観のあと、保護者の方から

『卒業論文』を書いているんだよ、と子どもから聞かされたとき、作文の少し長いものを書くんだなぐらいしか思つていませんでした。ふだんほとんど本を読まない子なのに、卒論を書くための本を借りにいったり、書店で本を買ってといつたり、がんばっている姿を見ることができました。卒論発表会でも、織田信長について一生懸命まとめたことを発表する姿に驚きました。家で論文を読ませてもらおうと思っています。うんとほめてやります。ありがとうございます。」という感想をいただきました。

二、知的好奇心が刺激される取り組み

「おわりに」で、子どもたちは論文でわかつたことと論文を書くことをとおして学んだことを書きます。

「終わった。第三章、最後の文字、そして丸を書き終わった。わたしはこのひとことをあげてしまいました。」

この子の達成感が伝わってきます。
「調べて、調べて、調べぬいたけれど、また新しい分からないことがでてきました。」と書いている子もいます。新体操について書いた子は

「わたしがこの論文を書いて『これこそ』と感じたものがあります。それは『新体操は自分達一人ひとりを育てていこう。』と書いていることです。これは、わたしがこの研究論文を書いているうちに自然にできた考えです。どういうふうに育つしていくかは、人それぞれだと思います。その人が、育てていきたい方向に育つていくのではないでしようか。」
この論文を書くなかで、自分なりに新体操について考えを見つけだしたのです。

本を読み、まとめあげていくことを通じて、

思考力が育ち、知的好奇心が刺激されていくのだと、あらためて感じました。

三、歴史研究論文への「道風」

学力研の加藤先生が私の「卒業論文」の実践を追試してくれました。有難いことです。

「社会科で歴史上の人物や偉人に学習したことを探るためにまとめることはしていたが、論文にまとめるということはなかった。この論文は、子どもたちが6年間で学んできたことの集大成として取り組ませたい。小学生生活でやったことがないことに挑戦することの意味を実感すること、「私にはできない」と思っている子たちに自信をもたせるためにも達成する価値がある。・それらの活動を通して粘り強く取り組む力、ものごとを俯瞰してみることのできる力を身に付け、次の学習につなげていくこと、仲間や教師とのかかわりを楽しむことが最大の目的である。しかし、具体的にどう取り組んだらよいのかも分からなかつたため、深沢先生に聞きながら進めることにした。」

（次号へ）

リレー連載「来年度の全国大会講演者新井紀子さんについて」

「一に読解、二に読解、三四が遊びで、五に算数！」

春日井学力研 山口 左知男

新井紀子さんの名前を知ったのは、二〇一五年の十二月でした。きっかけは、現在いよいよ小中学校に導入ということで物議をかもしているデジタル教科書です。

当時私の勤める春日井市は「春日井スタンダード」という上からの「教育改革」に席巻されていました。その後全県的に（いや全国的にか）一気に広がるスタンダード「運動」の第一波でした。春日井スタンダードの特徴は、全校での画一的な学習規律・教室環境づくりの徹底と「先進的な」ICT教育の「充実」を一本柱に教育の効率化を図り、子どもたちに「わかる授業」をつくる、というものでした。

柱の一つであるICT教育の中核になるのがデジタル教科書でした。春日井市では全県に先駆けて教師用デジタル教科書を全学年分市内全校で購入し活用していました。市内にスタンダードの拠点校をつくり、全

国に向けての研究発表を実施。その後も毎年公開授業研究会を行うとともに、市内各校に向けては教務主任・新任・若手教員を

頻繁に拠点校に集め研修会を行い、実践を周知徹底していきました。そんな頃に新井さんのデジタル教科書に関する主張を知ったのです。

既に文科省では「デジタル教科書の位置づけに関する検討会議」を二〇一五年五月より開催していました。そこでは児童・生徒用デジタル教科書について論議されました。同年二月に実施されたその第六回に新井さんはオブザーバーとして参加され、意見を求められていました。

新井さんはデジタル教科書のメリットとして挙げられた諸点について論理的に問題点を述べられていました。特に授業内容に関わる部分は、以下の4点に関してでした。要約します。

①「障碍や困難がある子どもたちに大変有益である」に関して。必要な子どもたちは非常に重要であるが、動画や音のコンテンツはユニバーサルデザインではない。現在のものは盲・ろう児には利用できないものが圧倒的に多い。

②「動画・音声など紙の教科書では表現できないメディアによって学びが広がる」に関して。タブレットPCでは画面の面積に制約が大きく、複数の教材を広げて一覧しつつ学習を進めることは困難。何よりも先行研究からスライドショーで写真を見続ける子に写真の記憶を聞いても全員が「わからない」と答えたという問題がある。

③「教科書掲載の問題の即時採点とフィードバックができる」に関して。ドリルの穴埋めと選択式問題に限られる。小論文自動採点は、論理性が高い平易な文章、オリジナリティのある文章に低い点がしばしば反面、全く意味不明な文章が高い点を取る場合が出てくる。何よりも、これに慣れてしまうと、すぐに答えが出てこないことにイライラしたり不安になつたりするよ

うになる。

④「協調的学習が進む」に関して。グループワークにPCを持ち込むことで視線が個人のPC画面に奪われて会話が減るということが先行研究により論証されている。

以上のように使用によって生じる問題点を的確に指摘されたうえで、タブレットPCを前提とすると、デジタル教科書を特に小中学校に導入することは財政負担を上回るメリットは感じられないこと、AIに代替されないような能力をどのように身につけるかを検討することの方が喫緊の課題であると明快に述べられていました。当時諸団体から執筆・報告の依頼を受けていた私にはとても参考になり、新井紀子さんという研究者に対する信頼も高まりました。

新井さんとの二度目の出会いは、二〇一八年です。ベストセラーとなつた「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」でした。本屋の店頭で見つけ即買いました。衝撃的なタイトルにも惹かれましたが、学ぶことの多い本でした。

第一に、読解力がこれから先に求められる学力の中核であり、日本の中高生の読解

力が今や「危機的と言つてよい状況」にあるという指摘です。新井さんによれば、今後AIにとってかわられる可能性の低い仕事を考えたとき、その共通点は「コミュニケーション能力や理解力を求められる仕事」、もしくは、「柔軟な判断力が求められる肉体労働」であるとされ、中でも特に問題となるのは「読解力を基盤とするコミュニケーション能力や理解力」であるとされました。読解力の重要性は当時から学力研究によく話題に上りましたが、改めて痛感しました。

第二に、AIと共に存する社会において、教育の喫緊の最重要課題は、「中学卒業までに中学校のどの科目の教科書も読むことができるようなりアリティのある子どもに育てること」だという指摘です。「今や格差」というのは、名の通る大学を卒業したかどうか、大卒か高卒かというよなことで起こることは、名の通る大学を卒業したかどうか、ではあります。教科書が読めるかどうか、そこでは格差は生まれています。」という主張とともに、「教科書の内容がはつきりとイメージできるようななりアリティのある子ど

も」という目指す子ども像に共感を覚えました。想像力と論理性の大切さです。

第三に、新井さんの読解力調査で明らかになつた点です。特に以下の三点。読解能値は中学校の間は平均的には向上するが、高校では向上していないこと、通塾の有無と読解能値は無関係であること、就学補助率、家庭の経済状態とは強い負の相関があるということ。小学校教師のなすべきことが明らかになっており、身の引き締まる思いがしました。

第四に、学校教育に何が必要かという指摘です。「一に読解、二に読解、三、四は遊びで、五に算数」「遊び」といっても、手先や身体を動かす、モノに頼らない遊びです。そして、日本の学校が誇る、給食当番や掃除当番などの班活動。それ以外のものは「いらない」少しだけ論ではあります。いや社会もいる、理科をやらんでどうすると言われる方もいるでしょう。ただ義務教育学校、ことに小学校の優先順位としては確かに「こちではないか」と私も思います。特に「遊び」と「班活動」に強く共感しました。

夏の大会での講演を楽しみにしています。

1〇期 先生のための学校

先生のための学校 理科

「低学年理科的課題から高学年理科までを展望して」

事務局長 固本 美穂

■講演一 荒井先生

理科は、単に知識を得得するだけではなく、子どもたちが田の前の自然現象に「ふしがだね」と感じ、素朴な気持ちから、自ら探究し、科学的に解決する力を育むことを目標としているのだ」と改めて教員直々がかけになつました。

1. 「理科」の定義とは

「道徳、ことわり、人の力では支配し動かすことのできないもの」という言葉を紹介していくもしました。理科が自然の法則や規律を探求する学問であることを深く表しています。

2. 生活科から理科へのつながり

小学校低学年の「生活科」では、子どもたちが身近な自然に触れ、「かんたんしそう」「せんべいしそう」といった活動を通して、五感を使って探求する基礎的な経験を積みます。「観察」「記録」の活動は、理科における「ふしがだね」という探究心を育みます。しかし、

ける「知識及び技能」の基礎となり、後の科学的な探究活動につながる重要なステップです。

3. 「ふしがだね」が育む探求心

3年生の理科の教科書では「たぐひかごの種が紹介され、その横に書かれていた言葉『ふしがだね』にあつたのは、理科教育における問題解決の糸口」を明確に示しています。「ふしがだね」という問い合わせは、子どもたちが自然現象に対しても抱く素朴な疑問や驚きを大切にして、学習意欲を高めます。また、「なぜだらけ」「えうしてだらう」という疑問が、やがてなる観察や実験へつながり、問題解決の力を育むきっかけとなります。

6. 板倉聖画

「優等生本意たつた」これまでの理科教育」板倉先生は、「正しい結果」を重視するあまり、子どもたちが、科学の魅力を実感できない優等生本位の授業になつていていたことを問題視し、すべての子どもが科学を「たのしい」と感じられるよう、自ら予想・討論・実験を通じて科学認識を深める「仮説実験授業」を提唱されたとのことです。「ここでも、どの子どもも「樂しかった」「よくわかった」と感づられた授業を実践してもらおう」という探究心を育みます。しかし、

中学校の教科書を見せてもらひ、その説明と専門用語の多さに、圧倒されます。小学校で培つた観察力を土台に、科学的・体系的に学ぶのだと強く感じました。

5. みんなで学ぶ理科授業

荒井先生は、実験結果において、必ず黒板に書かれてくる、ところを「行ってくる」のです。それは実験がつましくないのでなくともです。いつもかまつとしたところに「どの子も伸ばす」ところで、大事に取り組まれているのだと、「これ」がよくわかります。

■講演2 久保先生

理科の教科書を用いた学習について考えました。現代社会で求められる「資質・能力」をどのように育むかについて考察しました。特に、図や資料が豊富な説明文教材としての教科書の役割と、それを活かしたノートの可能性が議論されました。

1. 教科書による「学力」

社会科や理科の教科書は図や資料の入った説明文教材として、教科書を読解し記憶する」とは、基礎的な学力を確立し、「学力がついたかつてないのか」を明確に把握する上で不可欠です。

2. 教員先行型理科が子どもを使はず

「授業始めに、学習する範囲をしっかりと音読み、教科書による「教員先行型」授業を子どもの子」も同じレベルで保証し、基礎知識を持たせます。「つしてからみんなで共通の基礎知識のもとにしつかり実験し、検証していく授業形態が子どもの子も伸びる理科であることは考ります」

つまり、授業の導入として、教科書の内

容を丁寧に音読する」とは、その後の学習の土台を築く上で非常に大事だということです。「どの子どもも、学習する単元や項目について共通の基礎知識を持つことができる」とは、「れは、子どもたち全員が同じスタートラインに立ちたい」とを意味します。教科書の音読や内容理解を通じて、読解力と記憶力を高められます。「れは久保先生が最初にお話された

「学力は人類の文化遺産」

という考え方にも通じます。

今回荒井先生も、久保先生も、みんなが伸びる学びを「かに理科」つくり出すが、どう?」とを投げかけてくださいています。一部の「優等生」だけでなく、すべての子どもが主体的に学びに参加し、それぞれが自身の理解度を深めながら伸びていくことを大事にされています。

■参加者の「感想

「ノートを書けない、ではなく、担任をした日からノートに書くことを鍛えなければ、伸びるはず。この」とに時間をかけた」とは大切。実験の結果を「文」で書くこと。楽しかったなあ、だけでは残らない。

■討議より

・中学生の子どもと支援の子どものノートフルについての宮川先生の「発達の曲線」の話がとても参考になりました。
・木登校の子どもの家庭に求めるのは、家庭学習ではなく、生活していくためのノーツと家事。

には教科書が大事、名古屋市が使つて、実験・観察ノートに甘えてくる。今の授業を見直し、子どもの学習能力を伸ばすような指導をしたいと強く思いました。

ノートに書かせる」とは(絵も)、客観的に自分の知識を自分のものとして残す」とい

う。教師の要求レベルが子どもの学力を想定する。学ぶ→実験→書く→学ぶ(教科書にもどる)→書く(テスドづく)

学力研セミナー

◆事務局だより 国本 美穂

ければ面白くないと語り、鑑定をかかっている。

◆学力研最新情報 岸本ひづみ

○新井紀子さんへの期待

ただいま、8月の全国フォーラムの準備作業を、急ピッチで進めています。特に、記念講演者の、新井紀子さんに、どんな内容で講演していただきを、研究所長の深澤さんを中心に、連絡を取っています。

依頼の一部を紹介します。

絶対必要な「読解力」についても、示唆があると期待しています。

○先行申し込みをひらくか

実は、会員さんには、先行申し込み制をどうかと検討しています。年会費の有効期限は、3月までです。年度代わりの時期に、また4000円をお支払いいただいでも、会員更新をしていただく方や、新しく会員になつていただいた方に込みを優先受付してはどうかということです。

詳細については、3月にお知らせします。

8月1日(土) 9時半開会(予)

午前 全体会
午後 学年別講座＆分科会
会場 エルのおさか
谷町線・京阪天満橋駅から
歩7分

子どもたちの現状分析だけでも、参考になることが多いと思います。そして、学力低下を防ぐために、

2回～4回(土)にスケジュール
「低学年社会科課題から3、4、
5、6年生がわかる社会科へ」

講演1

講師 深沢 英雄
和歌山大学教育学部非常勤講師

学力研の社会と言えば深沢英雄、休みのたびに現地調査して教材化、事実を大切にする社会科は有田和正氏から学んだという。6年生の「歴史論文」の実践も、師の岸本裕史から学んだ

講演2

講師 久保 齋

先生のための学校校長

3年生では、数え歌で市の地図を覚えさせる実践、4年では、

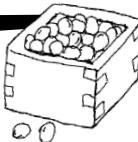
ゴミ処理を自然のリサイクルで、5年では知識のネットワークを広げる「○○の旅」と社会科満点大作戦、6年では予習による授業と、歴史学習で教室文化を

知的に広げる歴史新聞実践などいろいろやってきた、子どもの本能と発達に則った社会科授業をやってきた。社会科は覚える

■学力研・春の愛知集会
<https://www.kokuchapro.com/event/74d4031fab82d85e99500ef65dd085fc/>

対面講座のよも、それは「感情が揺らぐるな！」です。講師の「非言語情報」が参加者の感情に刺激を与えること間違いありません。またお知らせせさせていただきます。「まぐまぐ」でもお知らせさせていただきますので、お見逃しのないようにしてください。

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2026年 2月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしています。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

2/

- | | | | |
|--------------------|-------|-----------------|---------------------------|
| 20 (金) 伊丹学力研 | 18時半～ | 伊丹市役所横サイゼリア | 前田 090-9715-3830 |
| 21 (土) 大阪教育サークルはやし | 午後 | エルおおさか | 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 27 (金) 春日井学力研 | 17時半～ | レディヤン春日井(JR勝川駅) | 山口 080-6904-1697 |
| 27 (金) いろえんぴつ (加印) | 18時半～ | なんなん広場会議室 | 岸本 090-9117-6330 |
- オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等はご連絡下さい。

- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830
- みなみ学力研 9時45分～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp

《全国キャラバン等 今後の予定》

- 学力研・先生のための学校【全5回】 会場：たかつガーデン

2025年

1月17日(土) 13時半～16時45分【済】 2月14日(土) 13時半～16時45分

- 学力研・春の地域集会 3月29日(日) 10時～16時30分

会場：レディヤン春日井 (JR勝川駅)

「やっぱ学力！ 子どもたちを伸ばすホンモノの学力づくりを」

講師：岡本美穂 堀井克也 小川慶子 加藤英介 参加費2000円

- 春の先生のための学校【オンライン：会員限定】

3月22日(日) 4月12日(日) 5月17日(日) 【3回講座】

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーす」などで)

- 家庭塾『春のほっこり家庭教育カフェ』 2026年2月15日(日) 13:30～

於：京都下京いきいき市民活動センター 2F 会議室

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

※いろんなことがあるでしょうが、ぜひ、教師をやり続けてください。(荒井)

ご意見・ご感想は下記まで

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 荒井 賢一 | E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 李 詩愛 | E-mail iwamotoshie@gmail.com |
| 堀井 克也 | E-mail katsuya4k1h9@gmail.com |
| 加藤 英介 | E-mail hgrtd533@yahoo.co.jp |